

マダム見聞録



No. 7 フィジーの宗教事情 藤井由佳(協同総合研究所)

フィジーでは、フィジー系フィジー人と、イギリスによる植民地時代に連れて来られたインド系フィジー人がおよそ半分ずつ暮らしていることは以前お伝えしました。フィジー系とインド系の人々は、言語、生活様式、食べ物、そして宗教など様々な点で違います。フィジー系はほぼ100%キリスト教を信仰していて、メソジスト派がその8割を占め、世論形成上大きな力を持っています。他方インド系は、8割がヒンズー教徒です。次に多いのがイスラム教徒で、ほかに少数のシーク教徒やキリスト教徒がいます。全人口に占める割合は、キリスト教52.9%、ヒンズー38.2%、イスラム教7.8%です。

キリスト教がフィジーに伝来したのは1830年でした。普及は急速に進みました。ヨーロッパ人が来る前、フィジーの人々は土着の宗教を信仰していました。カメヤエビ、ヘビ、タコなど多くの神々の神話が現在も各地に残っています。日本ではそれほど定着しなかったキリスト教ですが、なぜフィジーではこれほどまでに信仰されるようになったのでしょうか。



日曜日は教会へ行く日

フィジーの宗教事情

キリスト教改宗のきっかけ

大航海時代、ヨーロッパの列強諸国は競って世界に船を出し、資源を求めて多くの国を植民地にした。しかし、「食人」の評判があったことから、フィジーに白人が入植したのは周辺国と比較するとかなり遅い。1643年、タスマンはフィジーを発見したが、凶暴な人々の評判を恐れて上陸しなかった。

また、クックは1774年に南ラウのヴァトア島に上陸したが、同じような理由でそれ以上踏み込むことはなかった。

1789年、タヒチを訪れたバウンティ号は、褐色のビーナスのような美女たちにキスの大歓迎を受けた。まさに「南太平洋の楽園」である。船内の釘と引換えに、彼女たちの熱烈な歓迎を受け続けたが、備品の釘は底を

尽き、船に使用している釘さえも抜きはじめた船員たち。それを見たウィリアム・ブライ船長は、「このままでは船が解体してしまう」と危機感を抱き出航させるのだが、船員たちはタヒチに残りたい一心で船長ら数人をトンガ付近でボートに放逐。48日間漂流した船長らは、フィジーの本島を含めた39の島を発見し、地図を作成することとなる。当時フィジーには6つの王国が存在し、部族間の抗争が続いていた。

その後、停泊中の船や座礁した船から脱出し、自らフィジー人の中に身を置く白人が現れた。また、フィジーにサンダルウッド（白檀）が見つかったことから商人が出入りするようになった。こうしてフィジー人と西洋文明の関わりは非公式な形で始まった。しかし移住者の多くは、本国では「はみ出し者」や「ならず者」と呼ばれていた者が多く、暴力的であった。その中の一人、スウェーデン人チャーリー・サベージは、パウ島の首長のもとで、銃で武装した外人部隊を組織した。それまで刃物さえもろくになかったフィジーでは、銃は当然大きな力を発揮した。しかし、あまりの野蛮性のためフィジー人からも恐れられ疎まれる存在となり、1813年、サベージは殺され、そして食べられた。そればかりでなく、骨を粉にされてカバ（フィジーの伝統的飲物：『協同の発見』2004年10月号参照）と一緒に飲まれたという。

その頃、トンガの首長マアフは、「白人の神がこれらの兵士と銃と火薬を作ったのなら、彼が唯一の神だということも本当に違いない」と、フィジーよりも先にキリスト教を受け入れていた。そして1830年代、フィジーのラウ諸島にトンガ人キリスト教宣教師を宣教活動のため上陸させた。マアフはそれを政治的に利用し、宣教師の保護を口実に

ラウ諸島を征服していく。いち早く西洋文明が流れこんだらウは、現在も政治的に優勢である。

その後、フィジー人の野蛮性の払拭を目的とし、白人宣教師が英国政府の命を受けて上陸するようになるが、初めから

うまく事が運んだわけではない。1893年に着任した宣教師ハントとライスは、ソモソモの大首長トゥイ・ラキラキから提供された家のそばで食人を故意に見せつけられたため、窓を閉めようとする「窓を閉めるとお前たちも食べるぞ」と脅された。

トゥイ・ラキラキは決して改宗することにはなかった。「フィジーにいる白人で、神の教えを実践しない者がたくさんいる。キリスト教の教えは間違っているのではないのか」と批判している。だが一方では理解も示し、「白人の国から来るものは皆真実だ。銃も火薬も皆真実だ。だからお前の宗教も真実に違いない」とも述べている。

キリスト教受容へ

しかし1854年、トゥイ・ラキラキが死んだことで事態は急変する。彼の友人であり、後に「フィジー王」を名乗ることになるパウ島のザコンパウは、彼の訃報を聞いて改宗を決意したと言われている。さらに、長年争ったレワのガラニンギオが重病になり、停戦が成立したことも改宗に向かったひとつの理由であった。

トゥイ・ラキラキの指している「真実」とは、「神の力（マナ）」が現れたもの。「マナ」



トンガ人首長マアフ



ゴンバウ
初めてフィジー全土
を統一し、イギリス政府
から「フィジー王」の称
号を受ける。

とは奇跡を起こすような「霊的な力」と考えられている。従来からの呪術師と新参者の宣教師との間で病人を挟んでの争いがあったが、医薬の知識を学んだ宣教師が即効性という点で勝利している。そうして宣教師が人に与える薬も「マナ」とされた。

つまり、フィジーでは支配者は「マナ」を持っているべきであり、今までの神々のマナ以上の力をキリスト教に認めるや、その神を上位に据えたのである。「キリスト教の神が西洋人に文明を付与したのなら、キリスト教に改宗したら我々にも神は文明をもたらしてくれるだろう」と考えたのだ。

また、キリスト教受容の論理の根底には、ポリネシア地域に広く知られている「外来王」を受容するベースがあったと考えられている。フィジーで権威ある大首長の先祖は、征服者として到来したと言われている。キリスト教の神もまた伝説の外来王と同じくして受け入れられ、改宗は西洋文明の恩恵を受けるための手段であった。

京都文教大学文化人類学科の橋本和也教授は、「白人宣教師の果たした役割はささいなものだと思われる。改宗した地元の牧師が仲間を改宗していったことが大きな変化をもたらしたのだ。フィジー人のキリスト教への改宗は、地元の考えにしたがって、従

来の神々からより大きな「マナ」を持つキリスト教の神に乗り換えただけだと言えるのではないだろうか。」とホームページ上で言っている。

キリスト教伝来以後、フィジーの古代神信仰は邪教、悪魔信仰とされていった。しかし、現在に至っても、密かに御神体を崇めたり、小動物を生贄に捧げたりしている集団がいるという。彼らは表向きは教会の信徒であるが、裏では古代神を崇め、黒魔術を使う。黒魔術というものは、皆がその存在を信じている社会の中では効果を発揮し得るもの。フィジー人社会で生まれ育っていない私には起こらないが、フィジー人の彼らには何かが起こる。首長制の厳しいフィジー社会では、人々は規律や伝統を重んじ、自分の気持ちをあまり外に出さない。ある日、私は学校の副校長に質問してみた。「なぜフィジー人社会では率直にものが言えないのか。」彼はこう答えた。「あまり生意気なことを言っていると、いつか誰かが黒魔術を使って自分は殺されてしまう。」

教師になる前は警察官だった副校長は、フィジー人としては率直にものを言うほうで、他人に厳しくいつも怖い顔をしている。その彼が「黒魔術は怖い」と本気で言っていたのだ。そのとき、私は黒魔術の効果を信じざるを得ないと思ったことを覚えている。そして、フィジー人の宗教観の複雑さを感じた。



フィジー人 (1870年頃)

フィジー		日本
1789 バウンティ号ウィリアム・ブライ船長らが フィジーの地図を作成	1800	1801 間宮林蔵、サハリンを探検 1804 ロシア人使節・レザノフが長崎に来航 1808 イギリス船フェートン号、長崎に来航
1813 外人部隊を組織したチャーリー・サベージ が殺害される	1820	1823 シーボルト滞日 1825 異国船打払令
1830 トンガ人宣教師、白人宣教師が上陸 年代	1840	1837 大塩平八郎の乱
1847 白人宣教師一時撤退 1854 ソモソモの大首長トゥイ・ラキラキ死去 1857 ザコンバウが洗礼を受ける	1860	1853 ベリー提督、浦賀に到着 1854 日米和親条約締結 1858 日米修好通商条約締結 1867 王政復古の大王令 1868 明治維新 1872 東京・横浜間に鉄道開通
1874 英国植民地になる	1880	1889 大日本帝国憲法発布

番外編：宗教と私

私の赴任校では、どの学年にも週1コマの神学の授業が設けられていた。全校生徒約200人のうち、インド系フィジー人は2人しかいなかったもので、99%の生徒がキリスト教を信仰していた。フィジー語でタラタラ (talatala) と呼ばれる聖職者は常時学校において、朝会や各行事での説教を担当する。神学の授業では、聖書の内容を題材にして、それをどのように解釈し、日々の生活に生かしていくかを勉強する。

しかし厄介なのは試験だった。神学は進級テストの科目には含まれていないので成績とは関係ないが、授業として存在している限り、理解を深めることが必要であるとして、他の科目と同じように試験が行われていた。内容は、正誤問題、穴埋め、記述式などで、聖書をいかに理解しているかというよりも、記憶しているかを試す問題ばかりであった。

その試験監督をしていたときのこと。机

間を回っていると、ひとりの生徒が手を挙げた。質問があるという意思表示だ。「どうしたの。」と近づくと、その生徒はこう言った。「マダム、聖書って誰が書いたの？」えっ！？誰が聖書を書いたのかなんて知らない、とにかくすごく昔の人なんじゃないの、そもそも聖書って何なのだろう、あれって作り話でしょ、それじゃあイエス・キリストって何者なの、というようなことがぐるぐる頭を駆け巡る。しかし、私は質問に答えなければいけない。気を取り直して、「それって試験の問題でしょ。答えられません。」と言った。そんな私を生徒は、「マダム、先生なのに知らないの？」と不思議そうに見つめる。そうなのだ、私は知らない…。しかし、生徒は決して私を馬鹿にしているわけではなかった。先生なのに、そんなに簡単そんなことを知らないことが単に不思議だった。彼らにはキリスト教を信仰していない私が理解できないのだ。さらに言えば、私が

キリスト教を信仰していないことも知らなかったのだと思う。

そんなことがあってから、私は、良い機会だから聖書を読んでみようと思いつく。平易な言葉が使われている児童用の聖書を選び、自分のために一冊買った。それと並行して、書名は忘れてしまったが、オーストラリアの女性神学者が書いた、新約聖書の真実を探る本を読んだ。彼女は、自らもキリスト教の信者であるが、新約聖書に書かれている「処女受胎」や「キリストが水をぶどう酒に変えた話」、「水面を歩くキリスト」、「キリストの復活」等の奇跡に疑問を抱き、残されている古文書や遺跡を再検証して新約聖書に書かれていない真実や、新約聖書が人々に伝えたかったことを考察し、一冊の本にまとめた。この本は、キリスト教について知りたいと言った私に、ヒンズー教徒のインド系フィジー人の友人が貸してくれた。キリスト教を信仰していない者がキリスト教を否定的に考察したものではなく、信者の立場でありながら、どう考えても起こり得ない奇跡を疑い、その裏に隠された真実を証拠を提示しながら探っていく彼女の姿勢はすばらしい。さらに彼女は、真実を知ることによってキリスト教を信仰する気持ちがより高まったとも書いていて、これはキリスト教信者にも広く読まれるべきである本だと思うのだが、奇跡を奇跡のままにしておきたい教会は本の出版停止を命じた。残

念ながら現在は絶版となっている。

フィジーでキリスト教と出会ったことによって、イエス・キリストが架空の人物だと思っていたくらい何も知らなかった私に新しい世界が広がった。気がつくやうに、周りには様々な人たちがいた。職場ではキリスト教、イスラム教、ヒンズー教を信仰している人たちが一緒に働いている。教会、モスク、寺院が町に混在している。いろいろなお祈りの仕方があって、それぞれにお祭りがあって、どれにも首を突っ込んでみたけれど、私はそのどれにも当てはまる気もするし、そうでもない気もした。結局、私は何なのかよくわからなかった。

けれども、私だって今まで生きてきた。いろいろなことを教わってきたし、学んできたし、考えてきた。どこに当てはまるかというよりも、これからも謙虚さをもって教わり、学び、考えていく、それが大事なこと。

今までは、宗教や人種問題が原因で争っている人々を理解できなかった。どうしてそんなにわがままなのだろうと思っていた。でも、人には、どんなに話し合っても絶対に譲れない信条というものがあること、それをお互いに保ちながら仲良く付き合っていくためには、相手に対する尊敬と思いやりが山ほど必要なことを知った。それと同時に、国、言語、宗教、文化など違うことばかりの中にも、理解し合える部分が必ずあることにも気がついた。



Oilei, Turaga! (オイレイ、トゥラガ!)

Oh, my God!